

---

# あみタイツ泥棒

都 今舞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あみタイツ泥棒

### 【Nコード】

N1035H

### 【作者名】

都 今舞

### 【あらすじ】

結婚一年目の夫婦がマンションを買い、おしゃれな都会的生活から何もない郊外へ引っ越してきた。平和に暮らしていたが、ある日、妻の涼子が干していた網タイツのみが盗まれていたことに気がつく。犯人はだれなのか？何かの目的で故意に狙ってきたのか？不可解な出来事から涼子の恐怖が考えるたびに倍増されて行く。そんな新婚夫婦のやりとりを個人情報漏洩による不安を含め、コメディ&ミステリータッチで描いて行きます。最後までよろしくお願いします。

## 1 (前書き)

コメディタッチのミステリー(?) 短編小説です。読みやすいように分けて投稿します。  
よろしくお願いします。

遠藤涼子は昨晚からベランダに干してあった洗濯物を部屋へ取り込んでいた。

「あれ、おかしいなあ、どうしてないんだろう？」涼子は首を傾げながら、頻りに洗濯物をまさぐり何かを探していた。

もう一度取り込んだ洗濯物を一つ一つ確認しながら見てみたが、それはやっぱりなかった。

涼子は働く主婦二年目で、今は大手ドラックチェーンに薬剤師として勤務している。夫の俊介は片づけるのが苦手で、いつもすぐ物を無くすタイプだが、今日は涼子の方が何やら見つからずに探し回っている。

俊介はロケット開発に携わるエンジニアで、二人は三年前に友人の結婚式の二次会で知り合った。お互いに見た目が特に好みという分けではなかったが、何となく安全そうな人という事で、無難に愛を育み、一年前にゴールインし、結婚生活をスタートさせた。

俊介は一人暮らしの経験がなく学生の頃からずっと自宅に住んでいた。結婚後、新居はどこかに構えようということになったが、俊介の勤務地が湘南方面だったこともあり、しばらくは涼子の十二畳ほどの小さなワンルームマンションに転がり込むような形でいっしょに生活していた。

遠藤涼子は学生時代からずっと都会暮らしをしてきた。以前住んでいたマンションは駅からも近く、オフィスビルが立ち並び一角にあり、コンビニも居酒屋もあちらこちらにあり、買い物に不自由することはなかった。グルメ雑誌にもしばしば登場するような名店も建ち並び、窓からは港がきれいに見えるマンションだった。

便利な場所を離れるのには、少し抵抗を感じたが、俊介の勤務地が換わったのを機会に、二人はこの何もない土地にマンションを購入し、三ヶ月が過ぎようとしていた。

ここは何もない分、自然だけは豊かなところだった。二人の部屋は八階建て、四階部分の角部屋で、木々の間から朝日が登るのが見え、小鳥達のかわいい歌声と天気の良い日は光のシャワーで目を覚ます。しかし、夜になると真つ暗になり寂しいところだった。駅から家に帰る路は、すれ違う人さえあまりなく、帰宅が深夜になるような時は静か過ぎて、怖いくらいだ。帰宅途中に後ろ髪を引かれそうなネオン街もないので冬の夜長の時期には、いやでも早寝早起きを強制させられそうな立地条件だった。

ここへ引越して来てからは、休日に食料品をまとめ買いをするようになった。最寄りの駅には、牛乳一本買おうと思っても徒歩圏内にコンビニすらない。休日の過ごし方と言えば電車に乗って、どこか街へ買い物に出かけるのが定番になった。

そんな、この何もない暮らしにも馴れてきたと思う、ある春の休日に涼子がちよつとした異変に気づいた。

「やっぱりない！絶対、変だわ」涼子が洗濯物を抱えしゃがみ込んだ。

俊介はソファに横になりながら、野球をテレビで見ている。

涼子がじいっとしゃがみ込んだままなので、俊介が声をかけた。

「えー、変て何？どうかしたの？」

「んー、ちよつと言いくいんだけど、この間から何だか様子がおかしいのよ」

「だからその変て何だよ？何か失したのか？」俊介がじれったそうに聞いてきた。

涼子は少しモジモジしながら「だからさあ、異変を感じるのよ、このところ」

「おーお、それってもしかして、もしかして、あれか？」大柄な俊介が横になっていた体をひょいっと起こしたので、ソファが軋んだ。涼子は下を向きながら、それはもしかして勘違いしているんじゃない

いかと思つたが「俊介は鋭いから、すぐピンとくるかしら？」「少しわざとらしく聞いてみた。

「まあ、大体は察しがついたよ。俺もいよいよ覚悟を決めないといけないってことだな？まあ、いいさ、少々小遣いが少なくなっても仕方がないさ、そういうことなら」

涼子は俊介の成りきつた勘違いに吹き出しそうになつたが、そのままにして様子を見ることにした。

「そうね、まあ、小遣い減らして貯蓄に回してくれるなら、それに越したことはないし、いいことじゃない？」

「夫婦なんだから生理が来ないって、言われても困るような話しじやないし、近々そういうことになるだろうとも、思っていたから全然、OKだよ」俊介はニツコリ笑い、自分の胸を「俺に任せろ」と言わんばかりに叩いて見せた。

涼子はますますおかしくなつて、勘違いしている俊介に本当の事を言いくくなくなつたが、

「俊介、あれの話しじゃなくて、これの話よ」と洗濯して乾いたストッキングを持ち上げて見せた。

俊介は一瞬、何だか意味がわからないという顔して、ガクつと滑ると「何だ、人生に関わる一大イベントが起きたのかと思つたよ！靴下がどうかしたのか？俺はパンストなんか履かないから、何のことだかさっぱり分からないよ」と頭を掻きながら、小遣いの事までうつかり余計な事を言つてしまったという顔した。

涼子はちよつと困つた顔をして「んー、実はね、最近、洗濯する度に編みタイツだけが無くなつてる感じがするのよ！普通のストッキングは大丈夫みたいなんだけど」と俊介を見た。

俊介はニヤつと笑つて「何だよそれ、俺を疑っているのか？何かマニアックなものにでも使つてるんじゃないかとか？お前の履き古したパンストは、靴磨くのに使わしてもらうこともあるけど、後は知らねえなあ」

涼子は「そっか」と首を傾げ「もしかしたら、この辺に下着泥棒で

もいるんじゃないかと思って、ちょっと心配になっちゃったの」と下を向いて言い出した。

俊介は何が受けたのか、アハハッと笑い出して「えー、下着泥棒？お前のAAカップのブラじゃお粗末すぎて、代わりに編みタイツでも取って行ったってことか？」とからかうように言った。

涼子はムっとして「Bカップですう。今はAAカップなんて流通してないんですけど！」とほっぺたをプッと膨らました。更に続けて「この辺で前の所とちがって山が近いし、その辺の雑木林に人が隠れていても分からないんじゃないかと思って。それに・・・」と涼子が口ごもった。

俊介はちよつと呆れ気味に「何を言ってるんだよ！編みタイツの1つや2つなくなっただくらいで、下着泥棒扱いされたんじゃないか？風で飛んで行っただってこともあるし」大した話しではないとだるうという顔して涼子を見た。

すると涼子が「いや、この頃、編みタイツばかり何度もやられてる見たいだし、その他にもちよつと気になる点があつて急に心配になつてきたのよ！何か特別な趣味のある人に狙われているんじゃないかと思つて・・・」と心配そうに俯いた。

一瞬、俊介も黙つたが、何を言っているんだという顔をして「編みタイツフェチの変態がいるなんて考えるなよ！お前の編みタイツに一体どんな価値を見てるって、言うんだよ！いくら何でもそんな暇なやつはいないだろう？どんなやつなんだか、顔を見てみたいくらいだよ」と軽く笑い、窓の外を覗き込んだ。

1 (後書き)

続く

## 2 (前書き)

更新が非常に遅くてすいません。

懲りずにどうかよろしくお願いします。

余計な場面あったので、削りました。

涼子はダダをこねている子供のように「もう、せつかくマンションを買って気分良く暮らしていたのに、変質者が出るなんて、冗談じゃないわ！早く犯人を見つけださないと、安心して外に出れなくなるじゃない？」何とかしてよつと、俊介に訴えかけた。

俊介はしょうがねえなあという顔をして、部屋の中から外を見渡しベランダへ出て、注意深くベランダの端から端までチェックして見たが、特に異変は感じられなかった。

「おい、やっぱり痴漢が入って来るには、ちよつと無理があるような気がするなあ、下から登って来るには常人じゃ厳しいし、ネコ並の身軽さでもないと疲れて下着泥棒どころではないと思う。それにあの金網を乗り越えないとこのベランダには入って来れないわけだから、まあちよつと不可能と判断してもいいんじゃないかな？」俊介は雑木林とマンションの敷地を区別するために設置された金網を指さして言った。金網は5、6メートルほどあり、上部は10cmほど尖のついたギザギザになっていた。

そう言われても涼子は「でも、何か気になるなあ、編みタイツだけって言うところがなんだかねえ……」と不安げなため息をついた。

俊介が涼子の肩を軽くさすりながら「平気、平気って！一人暮らしじゃないんだし、俺のパンツでも十枚くらい干しておけば、男がいつぱい住んでいると思って、痴漢も入ってこやしないうつて、なんだったら空手着を干しておけば？格闘技でもやってるように見せかければ、流石にそんな家には近寄ってこないだろうに。前に有名な空手家の家に強盗に入って、犯人がボコボコにされて逆に訴えられそうになったっていう話し、聞いたことあるだろう？」

「うーん、でも……俊介は本当に格闘技をやったことあるわけじゃないから、本当に恐ろしい強盗が入って来たら、私を守りきれ

のかしら？」

確かに俊介の図体は大きいが、動きは機敏だとは言えない。子供の頃から勉強はできたらしいが、少し太めだった体型のせいもあって、かけっこはいつもビリ、運動は大の苦手で部活にも入らなかつたと聞いている。

俊介は手を横に振りながら「大丈夫だつて！まず部屋に入ってこれないように細工するよ。そういう仕掛けを作るのは結構得意なんだから」

「なんだつたら、本当に空手でも習つて、鍛えてやるかな」と、締まりのない体とは対照的に顔だけ勇ましそうに、空手の構えらしい格好をした。

そんな俊介の気遣いにも腑に落ちない様子で、涼子は不安げな表情をしながら洗濯物を片づけ出した。頭の中であれやこれやと不安な事を考え出し、下着泥棒以外にもいくつか気にかかることを思い出してしまった。

俊介は涼子の様子を見て「ほらほらそんなに神妙になるなよ、引越してせつかつくこの辺りにも慣れてきたところじゃないか？悪く考えすぎだよ！そろそろ夕飯の支度でもしよう？今日は俺も手伝うからさー」とでかい図体には似合わない甘え声を出して、涼子の気分を変えようと試みた。

実はこのマンションに引越してきてから、涼子は誰かに見られているような気がしてしかたがなかったのだ。

気のせいだろうか朝、時々いつしよになる20歳前後くらいの若い男に、足首あたりをじっと見られているような気がしてならない。変質悪意のある目線を送られている感じはしないのだが、なぜか脚に絡みつくような目線を感じる。まさか、あの若い男が自分をどこかでこっそり見ている、わざと同じ電車に乗ったりしているのではなか？そんな妄想がふと湧き出てきた。だいたいどこの誰なのかも知らないし、もっと若くて見栄えのいい女性はあらゆる場所に存

在しているのだし、そんな事は考えるだけでも下らない時間の無駄だと思うが、気になりだすとそんな事でも結びつけてしまいたくなる。

俊介は、ぼうーとしていている涼子を宥めるように「あれやこれやと考えてみても仕方がないからさあ、何か旨い物でも食べて、ゆっくり風呂にでも浸れば疲れも取れて、変な考えも浮んでこないだろう？」と後ろから堰かすように、キッチンへ導いた。

涼子は「うーん」とすつきりしない表情をしたが、俊介の助けを借りて夕食作りに取りかかることにした。

冷蔵庫の中身を覗いて見たら、豚の挽肉があつたので、二人で手分けして餃子でも作ることにした。

夕食が終わると、涼子は風呂に浸かりながら、鏡に向かつて自分の脚を映し出しどんなものかと眺めてみた。涼子は今年三十一になるが、顔立ちはともかくとして、脚線美にはちょっとした自信があつた。身長は165cm、足の長さは75cmと長く、膝から下はスラリとして足首も程よく締まっている。脚だけは両親の良い所だけを組み合わせ持つ優性遺伝子を授かつたと感謝したい気持ちになる。多少無理があるかもしれないが後ろから見たら、キャメロン・ディースにも負けないくらいプロポーションぶりだと我ながら思つて見るときさえある。俊介にも冗談まじりに“振り向かないで、その君”なんて歌われることがある。つまり振り向くと残念でしたと、言われているのも同然に聞こえる。もしや、この自称自慢の後ろ姿に惹かれて、ストーカーが付いてきたのか？それは一体どこから現れて付いてくるようになったというのか？

涼子は怪しい人物に会わなかつたかどうか、疑いのある場面をあれやこれやと思ひ浮かべてみた。今の状況と結びつきそうなところが、確かに浮き出てきた。ところが考えれば考えるほど気になる部分が多くなり不安が更に増えた。その一つはさり気ないおしゃべりから

漏れる情報の漏洩である。

2 (後書き)

〃〃〃

### 3 (前書き)

3部が長がすぎて、飽きられてしまったようなので  
短く修正しました。

どうぞ、懲りずに最後まで、よろしくお願いします。

しまった！CAF&amp;Eacute;で家族の仕事の内容や個人的面白可笑しい話しを何も気にせず、をペラペラと喋っていたことがあった。「ちよつと待った、あれは、まずい！」仕事の内容丸出し、個人情報満載と言えるものを普通のセールスマンに話してしまったことがあったのだ。涼子は急にある場面を思い出し、心臓が高鳴り出した。これは俊介にも話しておいた方がいいかもしれないと思うと、妄想が妄想を呼び益々頭の中で不安が大きくなっていた。

もはや、ただの網タイツ泥棒どころではなく、変な事件に巻き込まれているのでは？私が薬剤師であることを知って後をつけ、家を見つけたし、虎視眈々と調剤室の鍵を盗んでやろうと企んでいるような連中に狙らわれていたりして？

店舗勤めだとお客を選べないので、どんな人でも出入りすることができるし、白サギ、黒サギと呼ばれている詐欺師軍団でも通常の買い物客に混じってやって来る場合だ。調剤室には闇ルート

の売人が喜びそうな向精神薬、劇薬を扱っているから、鍵を持っている私はそういう人種に狙われる可能性だ。ありうる。

つい最近も、大病院から麻酔薬がこっそり持ち出されていた事件は、まだ記憶に新しい。どうやって薬が盗まれたのかと思えば、個人的情報を闇の軍団がどこからか仕入れ、防衛能力の薄い従業員を見つけ出し、巧妙な手口で鍵やIDを盗んでいた可能性が高い。ちよつとした個人情報でもどの場面で悪用されるかわからない時代なのだ。涼子も薬を管理している身分のため運が悪ければ、こうした事件に巻き込まれる可能性だ。十分ある。涼子は自分を取り巻く事件の可能性を考えているうちに、推理小説に出てくる世界が現実になっているような気分になった。

そうして自分が産み出した不安のせいで、リラックスタイムがリラ

ツクスどころではなくなってきた。

風呂から上がって、涼子は濡れた髪をタオルで蒔きながら、冴えない顔をして俊介の顔を覗き込んだ。

俊介はバスタイムを先に満喫し、冷えたビールでほろ酔い気分になりソファでゴロゴロくつろいでいた。涼子が風呂から出てきた頃には、350mlのビールが二缶も空っぽになってテーブルの上に転がっていた。

すっかり気持ちよくなっていた俊介はいつものエロ調子で「何だよ、随分風呂が長かったな！どこ洗ってたんだよ？」とからかうように聞いてきた。

涼子は俊介のおふざけに応じる余裕はないという顔をして「いろいろ気になる点を考えていたら、また怖くなってきちゃって」と不安げに眉の間に皺を寄せた。

俊介は「えー、またぶり返しちゃったの？さっきは考えてもしようがないって言ってたのに」おいおい勘弁してくれよと、面倒くさそうな顔して涼子を見た。

涼子は風呂に浸かりながら、もしかしたら誰かに狙われているかもしれないという不安に駆られた事を俊介に話した。

俊介は時々プッと吹き出しそうになるのを押さえながら、涼子の話しに初めからしようもないという感じで耳を傾けていた。

涼子は俊介が不安になるような事件のシナリオも考えていたが、あまりバカにするので言いそびれてしまった。

「おい、おい、どつかのミステリー小説だかコミックに出てきそうな話しだな！それは！だいたいサギって何だよ？鳥の一種か？鳥がお前の後についてまわるとてもいうのか？白だの黒だのいろんな色のサギがいるもんだ。お前の話しのサギは何色だ？青サギとでも名付けておくか？」

俊介は大きな背中をソファに凭れかけながら、惚けた老人のように、当然あり得ないという顔をして笑っていた。そして鳥が飛んでいるように両手を横に広げ茶化しては、一人で受けまくっていた。

涼子は真面目に取り合わない俊介を横目でじろつと、呆れた顔をして見た。本当に起こる可能性だってあるかもしれない話しなんだからと、ブツブツ一人ごとを言いながら化粧台のコンセントにドライヤーを差仕込み、濡れた髪を乾かし始めた。

俊介が何か言って面白そうに笑っていたが、ドライヤーの音でかき消されて聞こえなかった。

今の涼子にとっては面白い話しより、起こりそうな不安を早く何処かへ片づけてほしい気持ちのほうが強く、そんな話しにつき合う気力も失せていた。

涼子は、俊介のバカ！本当に怖いんだから、小説やドラマに出てくるような世界だって現実起こる事だってあるのに。私は仕事で扱っているものも薬だし、運が悪ければそういう事件や事故に巻き込まれてしまうことだってないと言えない。

それに女だし、最近はコンビニに行けば人妻を売りにしている雑誌だってコーナーを作って置かれているし、どこをとっても危険な要素がいっぱい。干してある下着類が盗まれることだってすごい恐怖なのに、どうして男の俊介には理解できないんだろう？大したことじゃないって思っているかもしれないけれど、盗すんだ編みタイツでキモイ男が変態行為をしているかもしれないと想像したら、気持ち悪くて身の毛立つ思いだ。涼子は自分の頭の中に、一番嫌いなタ イプの変質系男を想像すると湯冷めしたように寒くなってきた。洗面台で生乾きになった髪を横にブルブル振って、下を向くと本当に吐きそうになるくらい気分が悪くなった。

これ以上、色々な妄想が続くようだったら、精神安定剤のお世話にならないと明日の朝を迎えられないと思うほど、涼子の不安は大きくなってきた。

俊介はそんな涼子の様子を深刻と受け止める間もなく、ビールの酔いがまわってきたのか、ソファに座ったまま顔を下に向け船を漕ぎだしていた。

涼子はつけっぱなしになっていた耳障りなテレビを消すと「俊介ちよつと、こんな所で寝ないで、もう寝るんだったら、ベッドに行つてよ」

俊介がハツと気づき寝ぼけ眼で廻りを見渡した。

「おお、悪い！毎日一生懸命仕事してるものだから、週末になると疲れちゃつてなあ」と座ったまま拳を震わせ、全身で大きく伸びをした。音が無くなったりリビングに俊介のふぁーくという豪快なあくびだけが響いた。涼子は俊介の座っているソファの横にペタンと正座をして神妙な顔つきで俊介を見ていた。

「ん？何か言いたそうだね？君」と言う俊介の問いにも涼子は呆れて「何もなし」と首を横に振るだけだった。

布団に入っても涼子は眠ることができなかつた。俊介は横で大きな高いびきを掻き、グツスリ寝ていた。眠れない者にとって鼾の音といるのは何とも耳障りなことか、いつもこんな煩いところでよく寝ているものだと思ってもびっくりするほどだった。眠れない夜は長い。もう夜明けが近いのかと思つて時計を見てみると、まだ午前2時を少し過ぎたところだった。5分くらい意識が遠のき眠りに導入しそうにはなるが、心臓がドキドキして再び目が冴えてしまう。涼子は一時間でもいいから眠りがほしかった。

不安を引きずつたまま翌朝を迎えた涼子は、浮かぬ顔をしていた。朝ご飯の支度中にも、何か考えごとをしている様子だった。

俊介の方は今日も頗る快調で、起きて早々朝の一番をつけるためにベランダへ出ていった。俊介はタバコを吸うことを朝の儀式としていた。吸わないと腸まで血液が廻らないらしく便通が悪くなってしまうのだ。

俊介は朝の美味しい一服が終わると、活発に動き出した自分の腸から発生する香ばしい臭いを悪戯な笑みを浮かべ、手で握り涼子に投げつけ戯けていた。

そんな俊介のおふざけにも今朝の涼子は無反応で、笑う気に怒る気もなれず、ぼーっと上の空で何か考え事をしているようだった。

俊介はそんな涼子の様子見て、ようやっと「やばい、これはかなり重傷かも」と気づき始めた。このままの状態が続くと冗談じゃすまないような夫婦の危機に陥るかもしれないと、少し焦り出した。涼子の話しをもう少し真剣に受け止めて聞かなければ、二人の関係にすきま風が吹きそうだと感じたのだった。結婚一年目にして早くもピンチ入りしたのでは溜まらないと、今迄のおふざけ行動を反省し改めることにした。

ぼんやりカップスープを煤っている涼子に俊介が「おい、どうしたんだよ！元気がないなあ？」

「うーん、やつぱり気になっちゃって、あまりよく寝れなかった」

「大丈夫か？あんまり気になるようだったら、今日は休んで家で休んでいた方がいいんじゃないか？」俊介が大きな背中を丸め涼子の顔を覗き込んだ。

「んー、でも一人で家にいると余計不安が募りそうだし、仕事場に行けばそれなりに紛れたりするから、休まない方がまだましかも」寝不足のせいか、涼子の顔はいつもより白く見えた。

「そうか、俺も今日は早めに帰るようにするから、余計な心配事は考えないようにしてがんばって過ごせよ」

俊介の優しい言葉に涼子は氣力がなく「うん」と頷いたが、何か言いたそうにしていた。

俊介はそんな涼子を見て内心、女ってどうしてこんな確証も持てないような事ですぐ妄想的に怯えたりするんだろうか？風の強い季節なんだから、自然のいたずらでその辺の木の枝に引っ掛かっている可能性だって十分にありえるのにと思ったが、今の涼子には通じないだろうと諦めた。

更に続けて俊介は思った。男は外に出れば7人の敵がいるって言われるほどサバイバルに生きているのに、女はよくもこんな得体の知れないもので悩めるよなあ？それに笑える。俺がもし下着泥棒になつたとしたら、こんなどこにもでもありそうな編みタイツなんて、

まちがっても盗らないけどなあ。どつかのおばさんでも履いていそうな色物だし、下着泥棒だって危険を冒してやるんだから、それなりのものを盗るだろう。どうせ盗るなら、持ち主が若くてかわいい子だと想像がつくような、ガーター付き編みタイツとか、Dカップ以上のフリルがいったぱいいたブラだとか、男の妄想に貢献しそうな物を狙うと思うのだが…と、いかにもAVに採用されそうな下着類がいくつも頭の中を過ぎっていった。

俊介はいつもながら、自分の妄想はすぐエロい方向へ飛んで行くと脱線しかかった思考を普通に戻した。こんなスケベな笑みを浮かべているのを涼子に見つかったら、不謹慎な奴だと状況を益々悪くさせてしてしまうだろう。妄想の続きは犯人をはつきりさせてからたつぷりすることにしようと思涼子の様子を窺った。

そんな俊介へ涼子が真面目な面持ちで口を開き語り出した。

### 3 (後書き)

次の展開も是非、よろしくお願いします。

#### 4 (前書き)

更新が遅くなりました。

どうか懲りずによりしくお願いします。

「実はさあ、俊介にも言っておいた方がいいと思うことがあったの」「うん？何？」

「んー実はね、この間、保険金が満期になったので、その手続きを取ったの」

「ああ、一時払い養老保険だろ？独身の頃に入れたっていうやつ。それがどうした？」

「言い難いんだけど、その手続きの時に．．．」と涼子が顔を曇らせた。

「んー？どうした、その顔つきは？ちゃんと聞くから話して？」

「その手続きを取った場所が、事務所じゃなくて、駅の近くのドトールだったの。しかも結構、混んでいた」

「えー！」俊介はそれを聞いて後ろに尻餅をつきそうになって驚いた。

「お前とも有ろう者が、そんな所で保険の手続きとは．．．なんじや、それ！どうなってんだ？」

「うん、金額がいくらかさう言うのは声に出して言ったりはしなかったんだけど、席に座って保険証券を広げて判子とかは押したりしてたし、隣の席と席の間隔がすごく近かったから横から見たら、住所が丸見えになっていたと思う．．．それに薬剤師の仕事の内容も保険屋さんにちよつと聞かれて、話していたから．．．」

「そうか、それは保険の担当がそんな所でやり取りをする事自体が、常識的じゃないなあ？」

「うん、最初は隣の席が空いていたんだけど、すぐに男の人が、私の隣に座ってきたし」そこから涼子は不安定な声になってきた。

「その時点ではあまり気に留めてなかったんだけど．．．でもね．．．よく考えてみたら、その人、一人にいるのに本を読むこともなく、私達の話をしつと聞いていたような感じがしたの」

「何か、私の話を聞く度にメールしていたような態度にも見えて、ちよつと怪しいと思うところがあったのよ」涼子は泣きべそをかきながら言った。

「それで、それで、その人だと思う人をこの近くで見かけたのよ」俊介が「マジかよ」という顔して涼子を見た。

「そのドトールって、どこ？この辺じゃないだろう？似た雰囲気の人ってことも考えられないか？」

「いや、絶対そうだと思う。いろいろ考えたけど、確信した。ちよつと変わった髪型で、お笑いタレントに似た人がいるから、印象的でよく覚えているのよ」

俊介がしばらく涼子を見つめ「そうか」と涼子の隣に座り「まあまあ」とやさしく肩を抱きかかえるよう言った。

「そうか、事情は分かった。編みタイツが無くなった事でその不振人物を思いだし、狙われていたんじゃないか？と不安に思ってるわけだな？」

涼子は情けない顔しながら俊介の横で「うん、うん」と頷いた。

俊介はいくら何でも隣に座ったやつが、いきなりストーカーになるのは、話しが飛び過ぎだと思ったが、すっかり渦中の被害者になりきっている涼子の神経を逆撫でしないように、とにかく話を聞くことにした。

俊介がやさしく「終わったことをいくら後悔しても仕方がないからこれからはそういう契約や個人の状況が分かるようなことは、絶対に他人の前ではやらないよう、気をつけようぜ」と涼子の頭を軽くポンポンと叩いた。

「うん。もうこれからはそういうことは絶対にやらないし、俊介の仕事に関する話しも、友達の事も、人がいっぱいいるような場所では絶対話さないようにしようと思うから」涼子は幼い子供に戻ったかのように、純心な目をして誓った。

ところが俊介は「えっ」という顔をして涼子を見た。

「ちよつと、待った！いかにも俺の仕事の事を外でしゃべってたって、

「いうような言い方しなかったか？」

涼子は、悪戯がばれた子供の仕草のように、肩を竦め気まずそうに下を向いて答えた。

「ごめんね！友達とお茶してるときに、俊介から聞いた同僚の失敗談とか、ロケット開発の進捗状況について、つい調子に乗って話しちゃったことがあって……」

「失敗談てまさか……日本の秘密情報機関についての話しじゃないだろうか？」

俊介は一瞬にして表情がvari真剣な面持ちになった。

涼子は下を向いたまま、益々小さくなり「ごめん」と俯いた。

「おい、おい！勘弁してくれよ！それは機密事項なんだからさ、外に漏れると拙いことになるから、絶対に話さないでくれよ」俊介はやられたつと、いう顔をして頭を抱え込んだ。

「まあ、俺が笑えるからって、お前に話したのがまちがいの元なんだけど、こういう事を外に漏らすと、罪になるし、もしも話をスパイと呼ばれる輩がキャッチしたしたら、マジでどっかの共産国へ拉致られて、マインドコントロールされるかもしれないんだぜ」

「拙いなあ、俺も今日から背中を他人に向けてないよう、背後には十分気をつけて歩かないと不意をつかれそうだ！」と目尻に皺を寄せながら渋い顔をした。

「えー、拉致なんてこわい。ゴメン、本当にゴメンね！私っておしやべりに夢中になると、つい悪のりしちやって、ついポロリと出てしまう所があるのよ」と涼子が半べそをかきながら言った。

「本当に気をつけてくれよ。こっちが訴えられちゃうんだから。さつきも言った通り、もう終わったことは取り返しがつかないし、後悔しても仕方ない。これからはとにかくそういう話しは絶対、他人に聞こえるような場所では、慎むように心がけてくれよ！俺も気をつけるからさ」と今度は俊介の方が焦りだした。

さつきまでは涼子だけの問題であった個人情報漏洩が、ついに俊介の身の上にも降りかかってきたのだ。

こうなると俊介も工口い想像どころではなく、真面目に漏洩問題について何か対策を考えなければいけないと、思った。

二人とも「今日は最悪かも」と思いながら朝支度を終え、いつもより注意深くドアの鍵を確認した。

「さあて、どこのどいつだ。お前が確かに見たっていう奴。そいつの正体を確かめなければ、俺の方まで安心できなくなってきた」いつもはたわいのないお喋りをしながら、明るく楽しそうに歩いて行くのだが、今日は二人ともすっかり無口になってしまった。

4 (後書き)

続く

## 5 (前書き)

最後まで、懲りずによろしくお願いします。

外は花粉の季節真っ只中で埃っぽく、花粉症防御のためにマスクやゴーグルを装備した人が目に入る。この中に怪しい人物が潜んでいるのではないかと、二人とも辺りを注意深く見ていた。何の関わりもない通りすがりの人達でさえ、顔がはっきり見えないと、狙われているのではないかと疑いたくなる。

今日はこの周辺のゴミ回収日で、市指定の黄色いゴミ袋が、収集場所に山積みになって置かれていた。

ゴミ袋の山には編みが被せられているが、少しでも隙間があるといわずらなカラス達がつつき回しては袋を破り、ゴミを道路に散乱させてしまう。都会では問題になっている光景である。まだ豊かな山が残っているこの地域でもカラス達は、山の実りだけでは飽きたらずに、やってくる。

涼子がそれを見て思い出したように「あっ、しまった。ゴミ出しするのをすっかり忘れた」と残念そうに頂垂れた。

俊介も人の様子ばかりを気にして歩いていたせいか、注意散漫になっていた。歩道に突き出て置いてある木製のゴミ箱の角がスネに当たってしまった。

「痛てー、何だよ！この邪魔な木のゴミ箱は」スネをさすりながら言った。

二人のテンションは、益々下がり気味になっていた。

「このゴミ箱、前から邪魔だと思っていただけ、今日ぐらい憎らしいと思ったことはないよ。今度こそ市役所に訴えて、退かさせてやる」俊介はいつもより、イライラしているように見えた。涼子はそれを見て、ひたすら落ち込むばかりだった。

ああ、参ったなあ、俊介まですっかりいつもと雰囲気違ってきちゃった。私が情報を軽く見過ぎて軽率な行動をしたから、俊介にまで迷惑をかけちゃった。

これから個人情報職場でも家でも、もつと慎重に扱わなければダメだわ。そのためにコンプライアンスがあるわけなんだから。涼子は深い後悔というため息を付かずにはいられなかった。

駅に着くと、俊介と涼子はお互い「じゃあね」と、それぞれ逆方向のホームで電車を待った。とりあえず対策は帰宅後にまた話そうということ、二人とも早めに帰宅をすることした。

俊介は電車に乗ると頭がひょっこり飛び出る程、背が高い。普段はこの背の高いのをいいことに、無防備な女性が見せるチラリズムを楽しんだりもできるのだが、今日はそんな谷間探しどころではなかった。スパイ小説の主人公にでもなったつもりで、いつもの目とは違う、自称鋭い目で怪しい奴がいなかどうか、周りを怯むことなく確認していた。

いつもは気にも留めたことがなかったが、確かに見かけたことのある奴が数人この電車に乗り合わせているように見えた。

この中に情報収集しているやつがいるのだろうか？疑う気になれば、そう見えてくる感じもするが、その辺の一般人だと思えば、何の関わり合いも、危険性もないように見える。

W i n n yなどの共有ソフトを使った情報収集も、巨大なファイアーウォールにかかっては太刀打ちできそうにもない。いったいどこから侵入してくるといふのだ。

危険があるとしたら自分のブレーンの中に入っている情報と技術ぐらいだ。ドラエモンの漫画のように、頭を開けて中身を引き出すこともできない。

俊介はそんな風に思い巡らせながら、通勤電車の中にいた。

5 (後書き)

続く

## 6 (前書き)

最後までよろしくお願いします。

多くの会社が所在している駅に到着すると、見覚えのある顔も、人の波に乗り去って行った。やはりこの辺りの会社に勤務している、普通のサラリーマンだったのか？

スパイ活動をしているアジア系外国人なんて、服装を見ればだいたい分かるものだ。地味で目立たない格好に、髪型は一九分け。表情もなく風のようにスーッと流れるような動き、こういうのがスパイに選ばれるような奴だ。おしやれで派手な奴は目立つから、絶対にスパイには選ばれない。

そう思っている俊介の横を、グレーのスーツに野球帽を被った、初老の小柄な親爺が人の波と一緒に乗り込んできた。

朝から野球帽を被っているこの親爺はどうかと思い、俊介は背の高さを利用して、相手の目線に入らぬよう、死角からこっそり観察してやろうと思った。

この親爺の顔は皺皺で目がギョロリとして、ロード・オブ・ザ・リングに出てくる調子者のスメアゴルのような容姿をしている。ネコのように軽い身のこなしで、人と人の間をスルリと抜けて、計画的に移動しているようだ。何か中国のカンフー映画にでも出てきそうな雰囲気にも見える。まさか特別な訓練を受けたスパイでは？

俊介はこの不思議な動きをする親爺に気づかれないように、様子を窺った。

スメアゴル親爺は顔を動かさずに目だけで、周りを窺っているようだった。あの目の動かし方はどう見ても普通ではない。怪しいと思っただが、今の俊介も親爺と同じような目の動きをしている事に気づき、自分でハツとした。

もしかこの動きを窺っているやつがいたら、俺が不振人物だと思ってもかもしれない。そして更にまた別な奴が、同じ目の動かし方をして

いる奴を見ていたとしたら、そいつが不振人物だと疑われ．．．こうして無限ループのように不審者を疑う目が広がり、ついには不審者が不審者でなくなる。

俊介が変な想像している間に親爺は次の行動に出ようとしていた。スミアゴル親爺は、会社役員風の五十代後半くらいに見える男性の背後に回り、ピッタリと収まった。

俊介は相手の視界だと思っ位置に体を移動させ、じっと見ていた。スミアゴル親爺は携帯のような物をバックから取り出すと、何かを探っていた。素知らぬ顔しながら、前にいる役員風の男の何かを探っているように見えた。

親爺の手元で一瞬何かが光った。俊介は見たのだった。赤い光が財布の中にあるカード情報をスキャンニングしている瞬間を見てしまったのだ。

本当に個人情報盗んでいる奴を発見してしまった。俊介はこの偶然に息を飲んだ。このまま逃がすわけにはいかない。冷たい汗が湧いてくるのがわかったが、ドアが開くその前にと、スミアゴル親爺の手をギュッと掴んだ。

スミアゴル親爺は皺の中にある目を大きく見開いて、俊介を見た。そして何か日本語ではない言葉を発していた。おそらく「何をやるんだ」とかそんな意味の言葉だ。

直後に「 4%& . . . . 」と韓国語らしい言葉で何か言っていたが、意味がわからなかった。

脇にいた女性がすぐに気づき、何か言い返えしていた。彼女は韓国語ができるらしく、スミアゴル親爺の発した言葉の意味が分かる様子だった。

被害にあっていた会社役員風の男は、最初自分が何をされていたのか気づいていない様子だった。暢気な顔して振り返って見ていた。俊介がスミアゴル親爺の手を掴みなが「この男があなたの後ろポケットに差してある財布から、カード情報をスキャンしようとしていましたよ」言うと、会社役員風の男は「えっ！」という顔して、「

これポイントカード入れとして使っているので、現金やカードはないので、あまり気にかけていなかった」

財布を後ろポケットに入れたまま満員電車に乗ればどんな事が起きるか、小学生でも分かるような事を、よくもやってくれるよと、俊介は呆れたくなった。

ポイントカードだつてりっぱな個人情報になるというのに、全く脳天気な会社員だと思った。

俊介と犯人の周りには取り囲むように、周りの乗客達の目があった。

電車が次の駅に到着すると、俊介はスメガゴル親爺を駅員に引き渡し、目撃した情報を一部始終説明した。

おかげで出社時刻を大幅に遅れてしまった。

スメガゴル親爺は、最近このあたりで頻繁に起る、窃盗に関する人物ではないかとの事で、嚴重に取り調べられることになった。

外国人による窃盗団の一味が逮捕されるのはよいが、いつもよりちよっと目を光らせただけで、こんな者にブチ当たってしまうことの方がショックだった。

それほど日本も治安が悪くなってきたということなのだ。俊介は複雑な思いになった。

6 (後書き)

続く

## 7 (前書き)

最後までどうぞよろしくお願いします。

一方、涼子は店舗の中にいた。

涼子は以前、横浜の店舗にいたが、引越しとほぼ同時に人事異動があり、今は世田谷にある店舗に勤めている。ここは以前のビジネス街にある店舗とはちがって、買い物客も地域住民が多い。

お年寄りの来店も多く薬の箱の字が細かくて読めないから教えてほしいから始まり、長々と世間話の相手をさせられるもある。

花粉の季節ともなると、どこも耳鼻科も待合室が花粉症患者で溢れかえっているのと比例して、涼子のいる店舗もアレルギー用の点眼薬や鼻薬の処方求めてやってくる顧客も目立つ。

涼子が目薬の在庫を確認していると後から、こもった男性の低い声がした。

「すみません、ちょっと」呼びかけられたので「はい」と振り返るとそこには男性の姿は見えなかった。

一瞬あれっと思ひ、きよろきよろすると、涼子はぎよっとして悲鳴を上げそうになってしまった。

顔の半分が大きなマスクで覆われ、黒いキャップをかぶった、小学生並に小さなおじさんが、目薬を持って立っていたのである。

「花粉ですごい目が痒いんだけど、どれがお薦めなの？」

牛乳瓶の底のように見える花粉よけのグラスのせいで、どこを見ているのかわからないそのおじさんの目は、昨日から編みタイツの件で怯えている涼子をいつそう恐ろしく感じさせた。都市伝説で語り継がれている“小さなおじさん”のようなその出で立ちは、今日の涼子にとっては刺激が強過ぎだと思った。

涼子は目をパチクリし、固まってしまった。

「花粉症のコーナにある目薬は、どれもほとんど変わりがありません。もっと効果の高い目薬をご希望の場合は耳鼻科を受診されることをお薦め致します」と、きこちない調子で肩には力が入っていた。

小さなおじさんは、まだこの人は仕事に慣れていないのかという顔をして

「ああ、そう。じゃあ、耳鼻科に行つて受診してくるかな」

それ以上は何も質問をせず、最初手にした目薬だけを持って、レジの方へ消えて行った。

涼子はお化け屋敷からでも出てきた後のような顔をして

「勘弁してよ！もう」と、思いつき深呼吸をついてしまった。

それを見ていた副店長が

「どうしたの？白い顔しちゃって」と涼子の顔を覗きこんだ。

「なんでもないです。やあ、ちよつと寝不足気味なだけです」とやりかけていた在庫チェックを続行し出した。

仕事をしていれば気が紛れて、心配事からも解放されるだろうと思つていた涼子の頭の中は、相変わらず止まることのない心配と不安が漂い続けていた。

アルバイトで来ている学生にも

「先生、今日はなんだか表情がいつもと違いますね？」と心配そうに声をかけられてしまった。

「今日はちよつと月のものが来ちゃつて、気分が重いの」ということにして涼子は、調剤室の裏に引きこもり、人に会わなくても済むように軽作業をして、一日の仕事を終えることにした。

いつも自分は楽観的な方と思つていたのに、こんなに小さな鑿のよくな、心臓の持ち主だったとは以外な感じがした。この出来事が起こらなかつたら、小心者だと言うことは、気が付かなかつたかもしれないと思うほどだった。以前、個人情報の流失を気にして、ネットショッピングなど一切しないとついていた同僚がいたが、今ようやくとその気持ちが分かるような気がしてきた。

涼子がPCの画面に向かっていると、携帯メールの着信音が流れた。「俊介だ」涼子がメールを開けてみると、今朝の車内で窃盗事件が起こつたことが書いてあつた。

それを読んで、涼子は更に血の気が引いた。

「やっぱり、いるんだ。そういう軍団」

「スキヤンニングって何？そんな機械あったんだ！」

それを聞いて、また新たな不安材料が増えてしまった。

「まずい、どんどん不安の渦に嵌って行く」

涼子は潰れたカエルのように力なく、デスクの上に頂垂れた。

定時に仕事を終了させると、涼子はどこも寄らずに電車に乗った。

あのドトールの隣にいた男がいないかどうか、周りを見渡して見たが、いなかった。

こうなったら何がなんでも、あの男が白か黒なのか、正体を知りたい。

## 7 (後書き)

続く

ありがとうございました。

## 8 (前書き)

今までの不安が解消されます。

どうぞ、懲りずによくお願いします。

駅へ到着し改札を出ると、外はすっかり暗くなっていた。日が徐々に長くなってきたが、六時半を過ぎると人の顔も判別できないほど暗くなってしまう。

涼子は暗い外を見渡すとやっぱり不安な気持ちになった。この辺りは幹線道路を渡って、涼子のマンションの方へ向かう路は暗く人通りも少ない。

俊介もそろそろ駅に到着する頃だと思うが、携帯を取り出して確認して見ようとしたら、既に俊介からのメールが入っていた。

「お疲れ様！今から電車に乗って戻るところ。いまどこ？」と書かれてあった。

「今、駅の改札出たところだから、バス停のところで座って待っているから」とすぐに返事を打ち出した。

涼子がバス亭の方へ向かって歩いてみると、既に中高年のおばさん二人がベンチに座ってバスを待っていた。

涼子はおばさんの脇の空いているところへ、ちょこんと座った。すると駅の方から、ピンクのシャツを着ている、痩せたO脚気味の若い男が近づいてくるのが見えた。

若い男は近づいてくるなり中年のおばさん達に昼間でもないのに「こんにちは、ヒヒッ」となんと奇妙な挨拶をしてきた。

涼子は顔見知り同士なのかと思つて若い男の顔よく見ると、朝時々見かけるあの人の脚をじつと見る男だった。

涼子が勝手に容疑者の一人と決めつけていた男が、なんとタイミングよく現れてしまったのだ。

涼子は緊張して「うあ〜どうしよう」と両手の拳に力を入れ、身構えていた。

初老の臙脂色のコートを着たおばさんが「コウちゃん、今帰り？今日は遅かったね」と声をかけていた。

すると若い男はいきなり「フツ」<sup>フツ</sup>と笑って「ストッキング履いてる？履いてるの？」<sup>フツ</sup>と言いながらそのおばさんの脚をジッと見だした。

涼子はその言葉を聞いたとたんドキドキ心臓が高鳴った。

「まさか、こいつだったのでは？」<sup>フツ</sup>と思うと首の後が痛くなって、額から汗が滲み出した。

おばさんは慣れてしている様子で大して驚きもせず、平気な顔をして答えていた。

「ああ、履いてるよ」

「どれ、どれ」

若い男は屈んでおばさんのストッキングを摘んでいた。そして隣の太ったおばさんにも同じように

「履いてる？どれどれ」と言いながら見ているのだった。

涼子はそれを見て恐怖で固まった。汗がいつそう噴き出し、もうダメ！今度は自分の所にくると思い、本当にベンチから落ちて卒倒してやろうかと思った。

ところが、若い男は涼子をチラツと見ると何も質問もせずに、すぐにおばさん達の方へ向き直ってしまった。

「ストッキング、フツ、フツ」

若い男は、おばさん達に向かって意味の分からない音頭をとりながら、バス停から離れ、去っていった。

呆然としていた涼子の横で、臙脂色のコートを着たおばさんが、隣に座っている太ったおばさんに話していた。

「あの子、自閉症の子なのよ」

あの若い男はストッキングに特別な拘りを持った自閉症の子であるという話をしていた。しかも若い女性には絶対にそういう質問をしたり、側に寄って触ったりはしないから、犯罪性になるような事はないと話していた。

どうやら、若い男の母親が身に付けていたストッキングに幼い頃より拘りがあるようで、母親と同じような年代の女性を見ると

「ストッキングを履いている？」と、聞いてしまう事だった。

涼子は若い男の出現にびっくりしたが、脚をジッと見ていたのは変質的な性癖ではなく、ストッキングの拘りによるものと理解できたため、自分の妄想の中にある容疑者リストから、この男を抹消するところにした。

しかし、涼子はよく考えてみると、母親のストッキングに拘りがあるのに、なぜ後ろから見た私の脚を見ていたんだろう？と思うと少々複雑な気持ちになった。

もつとも、こんなにリストに知らない間に登録されていたら、若い男にとつても甚だ迷惑な話であり、絶対他人には言えないことだが、

しばらく待っていると、俊介が背中を丸め、ガニ股でこちらに向かってくるのが見えた。「待たせた？わるい。今朝はこちらもとんだ災難で、会社遅刻になったし、参ったよ。たぶんあの事件は報道されたと思う」

俊介は涼子の前に立つと、おでこをさすりながら言った。

「もう、こっちはホント最悪！今さつきも、すごく怖い事があつて、心臓バクバクものだったし、俊介の今朝の出来事にもびっくりで、そんな窃盗もあるのかと心配になったし、今日は脅かされてばかりの一日だった！私もう既に神経の病気になつてるかも」

涼子はダダをこねる子供のような目をして俊介を見あげ、ベンチに凭れかかった。

「おい、大丈夫か？」

「俺もまさか通勤電車にタイミングよくあんな窃盗親爺が現れるとは、思つてもみなかつたよ。本当に涼子が心配していることも、もつと真剣に考えないと、いつ事件に巻き込まれるかわからないから、昨日は笑ってしまつて悪かつたと思つているよ」

俊介はめつたに見せない、真面目な眼差しで涼子に詫びた。日頃エ

口いおふざけで、戯けるのが好きな俊介だったが、いざとなれば涼子の事を真剣に考えてくれているのだ。

「あんまり心配だったら、明日は休んで家にいてもいいんじゃないか？たまにはそういう理由で休んでもいいだろう？」

「そうね、ありがとう！一応、調子が悪い事は言っているから、休める体制には、なっているけど」

「そっか、心配だなあ、ホントいやな思いをさせて悪かった」と俊介はペコリ頭を下げた。

腰掛けていた涼子の手を取り、一緒にマンションの方へ向かって歩き出した。

マンションのエントランスに入ると、一階のフロアから誰かの豪快な笑い声が響いてきた。

## 8 (後書き)

11で完結です。どうぞ最後までよろしくお願いします。

## 9 (前書き)

あと少しです。どっぞ最後までよろしくお願いします。

ふとその笑い声の主をたどって見てみると、それは見覚えのある顔だった。

「そうだ！あの男だ。探していたあの男が今ここにいるではないか！涼子は俊介の肘を揺すり、指を差して言った。

「見て、見て、あれ！あの人だわ。ドトールで隣の席いた怪しい男」「えっ！何？あのカンニングの竹山みたいなのやっ？」

「うん、うん」

俊介は何か意味ありげな顔して、ニタニタしながら、涼子を見た。

「あの人、知っているよ。あれはこのマンションの管理会社の担当だよ」

「えー！そうなの？」

「なるほど、言われてみれば、お笑い芸人みたいな顔だな」と納得したように言った。

涼子は、管理会社の担当をまともに見たことがなかったのだった。

俊介はボーとしている涼子に「まあまあ」と笑みを浮かべながら、手を取りエレベーターのボタンを押した。

そして、エレベーターに乗ると「漏洩問題、これにて一件落着！」と叫んだ。

玄関のドアを開けると、涼子はソファに雪崩れ込むように座り込んだ。気が抜けたように何も考えつかなかった。

すっかり安心仕切っている俊介に向かって涼子が口を開いた。

「でも、竹山さん情報を悪用するような悪い人じゃないって、言い切れるかしら？」

「それはどんな人間も100%善人とは言い切れないけど、竹山に

限っては、少なくともスパイの可能性はないから、俺の心配する件に関して言えば、白だと思う」

涼子は眉を潜めながら、心の中で「私の問題は解決していないじゃないか」と思った。

「それに竹山は、ある程度、住人の個人情報入手しているはずだし、社内でもそれについてのコンプライアンスがあるわけだから、守らなければ罰せられる」

「ネットイッフエチかどうかは、分からないけどね？性癖まで、わかるように、首からぶら下げて歩いている奴はいないし」

俊介はエヘヘという顔をして、いつものエロ調子に涼子を見た。

「もう！やめてよ。それが今、一番心配してることなんだから」と俊介を両手で押した。

俊介は、いたずらっ子のような顔をして笑った。

## 9 (後書き)

続く

ありがとうございました。

## 10 (前書き)

いよいよ、最終章です。

これでこの物語は完結します。

最後は和みについて書いたつもりです。  
最後までありがとうございました。

次の日の朝を迎えた。

不安を少し解消できたせいか、涼子はぐっすりと眠れたようで、鳥の囀る時刻になってもまだ起きてこない。今朝は俊介の方がいつもより早く目覚めてしまった。

俊介はベッドから重い体をのっそり起こし上着を羽織った。

三月になったばかりのまだ肌寒さを感じるリビングに暖房をつけた。締め切ったカーテンを開けると薄靄の景色の中、外は鳥達の世界になっていた。

俊介はベランダへ出て、様々な鳥の活動を目を細めながら見ていた。「平和だなあ、こんな所にいったい何がくるっていうんだらう？余計な心配なんてする必要がなさそうだ」と、ベランダでしか吸えないタバコに火を付けた。

遠くに見える梅の綻びが春の訪れを告げているようだった。

俊介がバードウォッチングをしながら、美味しそうにタバコを嘖かしている、涼子がまだ覚め切れぬ目をして寝室から出てきた。

涼子はベランダにいる俊介の後ろ姿を見て、またタバコかと思ったが、窓越しにコンコンと叩いて「おはよう」の挨拶をした。

俊介が「よおー」と後ろを振り返った、その瞬間に何か俊介の頭の上を横切って行った。

涼子は見たのだった。

黒い物体が編みタイツを加え、俊介の頭上高く横切って行くのを・

「あつ、見つけた！編みタイツ泥棒！」涼子が目を見開き叫んだ。

俊介はその黒い物体の正体をすぐに何か把握した。そのとたん「ブ」っと吹き出した。

犯人はやなり人間ではなかったのだ。

網タイツ泥棒は、いたずらカラスによるものだった。カラスが巢作りの材料に涼子の編みタイツを使っていただけの事だったのだ。

丁度今頃の季節は、カラスが産卵するために巢作りの材料を彼方こちらから、調達している最中だった。カラスは使えそうな物は何でも巢作りの材料として使いこなすほど、本能的に優秀なので、干しである涼子の編みタイツを見つけ、これは使えると失敬していったのだろう。

この辺りは、山を削って開発されているので、近くでカラス達が巢作りをしてもおかしくない場所なのである。

俊介は泥棒がカラスの仕業と分かると、緊張の糸がほどけ、たちまち頭の中が可笑しさでいっぱいになり、ゲラゲラ腹を抱えて笑い出した。

涼子は、今まで頭の中にしまっていたあった網タイツ泥棒に関わる変質者リストが、これですべて崩れ去った。そう思うと恥ずかしさとバカバカしさが一気に込み上げてきた。

いったい不安に振り回されたこの二日間は何だったんだろう？と肩の力が抜けた。

「でも、何もなくてよかった」と思った。

「だから、言っただろう？こんな所に侵入できるやつは人間じゃな  
いって、お前の編みタイツを欲しがるとは、結局人間じゃなかつ  
たてことさ！アハハ」

俊介はいつものエロ調子全開に戻ると、床を這うゴキブリがひっく  
り返ったように、手足をバタつかせ「これは最高」と笑い転げた。

涼子は、俊介まで巻き込んで散々騒ぎ立て、末の悪い思いだが、と  
りあえず取り越し苦労だと言う事が分かったので、ようやくいつもの  
の自分に戻れると安堵の笑みを浮かべた。

しかし、俊介を見て「いくらなんでも笑い過ぎだろう」と思ったが、  
心配させてしまったのだから、何を言われても今日だけは許す気分  
でいた。

俊介は腹の底から湧き出る可笑しさで、もうどうにも止まらないと  
いう様子で「お前はカラスのいたずらに振り回されて、仕事を休む  
準備までしてきたって訳か！勘弁してくれー」と涙を流して喜んで  
いた。

涼子は少々「ムっ」としたが

「俊介ごめんね！でも、たまにはこういう事があってもいいんじゃない？反省しなければいけない個人情報問題の大切さも分かったこ  
とだし」と恥ずかしそうに言った。

「アハハ！まあ、そうだけど、カラスの習性に怯えていたっていう  
のもね……」

俊介は笑いすぎでお腹が擦れそうとうずくまりながら

「おかげで朝から腹筋に効く、いい運動をさせてもらったよ。もう  
すでに腹が筋肉痛になりそうだ」

結婚してから俊介は幸せ太りなのか、少しお腹周りが前より太くな  
っていた。

「でも、この笑いもお腹の脂肪燃焼に、だいぶ貢献したんじゃないの？」と涼子も舌を出して言った。  
涼子は今回の事件で俊介が、見た目や思ったより、ずっと頼りになる人だと感じた。やっぱりこの人と結婚してよかったと、心から思い出合いに感謝した。

涼子が「そうだ！双眼鏡持ってきて、カラスの巣がどこにあるか、ちよつと探してみようか？」

「うん、そうだな！ちよつと探して見るか？面白そうだ。カラスは人が巢に近づくと威嚇するから、双眼鏡で遠くから覗いてみるしかないけど、もしかしたら近くにあるかもしれないな？」  
ベランダの外は薄靄から日が少し差し始めていた。

俊介は寢室のクローゼットの中から、双眼鏡のセットを持って出てきた。

「さて、さて、お前の編みタイツはどこに採用されているかな？」と俊介が双眼鏡をセッティングすると色々な角度から覗き出した。

「ここは元々カラスの里があったところを勝手に人の手で、マンションを建てるために奪ってしまったんだもの。編みタイツの一つや二つ巢作りに必要なら、提供したって当然なことね！泥棒したのは、カラスじゃなくて人間の方だったのかも」

涼子は朝の光を眩しそうに眺めて言った。

その間に俊介が早くもカラスの巣を捉えた。

「おお、あった！それらしいものがあったぞ！今、フォーカス合わせるからちよつと待って」と俊介が大きな魚でも釣れたかのように、嬉しそうに言った。

「ほら、ほら、涼子、ここから覗いて見て？はつきり中まで見えるから」俊介が涼子を支えて双眼鏡を覗かせてくれた。

涼子が覗くとそこには直径40cmほど大きなお皿のような形の巣

が樹木の間に出ていた。

そして涼子の編みタイツも卵を産む内側にしっかりと、組み込まれているのが見えた。それはまるで芸術作品のようだった。

涼子はそれを見てすっかり感動した。カラスにもちゃんと守るべき場所があったのだと。

今まで、ゴミ置き場で袋を漁っているのを見かけては、浅ましく邪悪なやつだと思っていたが、カラスにだってこのように生活があり、卵を産むためにがんばっていたのだ。なんだかカラスから生きるためのエネルギーを貰った気分がした。

「すごいね！私の編みタイツまで、はつきり見える」

「なっ、そうだろ？カラスって賢いんだぜ！巣を丈夫に作るのに針金のハンガーを運んできたり、ビニール紐まで使うんだぜ。抜群のアイディアはまるで俺みたいだ」

多少普通より、もの知りだと思っ俊介は得意げな顔をして言った。

「うふふ、そうかもね！」

「ホント、私の編みタイツが変態を喜ばせるために盗られたんじゃなくよかった。カラスの赤ちゃんを包むためのシートとして使われると分かったら、急に元気が湧いてきちゃった。見る世界によって、同じものでもこんなに変わってしまうなんて、すごい！」

涼子は昨日までの悪夢は、自分が作り出した幻だったと改めて感じた。

「いつも穏やかに暮らしていれば、そうそう悪いこともないさ」と俊介がカラスを優しく見守るような目で見ていた。

「ところでカラスも産卵のために巣作りをしているわけだから……」と俊介が意味ありげな笑みを浮かべた。

涼子が「えっ」と振り返ると

「さてさて、俺達も巢作りじゃなくて、子作りでも、しよつか？」  
と俊介が鼻の下を伸ばして涼子を見ていた。

涼子は呆れた顔をして「ちよっと、朝から何いつてるのよ！ほら、ほら、そろそろ支度しないと仕事に遅れるわよ！カラスのようにせつせと働いて、明るい未来の為に宇宙開発をしなさい！それがあなたの使命でしょ？」

俊介は「俺は家族計画も考えたかったんだよ」と思ったが、これは涼子に一本取られたと思い、しぶしぶ朝の支度を始めるのだった。

## 10 (後書き)

いかがでしたでしょうか？

個人情報取り扱いには十分注意して下さい！

そんな願いを込めて書きました。

最後まで、おつき合い頂きありがとうございました。

次はおまけ部分です。

よろしければおつき合い下さい。

ありがとうございました。

## おまけ（餃子作りのやりとり）（前書き）

夫婦で餃子作りをしている場面です。

元々は2章に入れていましたが、物語の進行上、特に必要ないと思っただので削除しました。

## おまけ（餃子作りのやりとり）

俊介が餃子に入れるニラと切ってくれると言うので、大丈夫かな？  
と思ったがお願いして見ることにした。俊介は一人暮らしの経験がないので、料理や炊事に関しては、はっきり言って全くセンスのないやつだった。この間もジャガイモの皮をピーラーで剥かせてみたが、芽を刮り抜かず皮を厚く剥いてしまうので、ジャガイモは原型を留めることがないくらい小さくなっていた。食べるころより皮の方が多く出たくらいだった。

洗濯物を干してもらっても、皺を伸ばさずピンにつまんで干してしまうので仕上がりがひどく後が大変になる。シャツも靴下も切り干し大根のように小さくシヨボシヨボになって乾いてくるので、アイロンが必要になってしまふ。俊介には思わず、家政婦くびと言ってやりたいくらいだった。お手伝いがしたいと言うときにはお願いするようにしている。幼児の方がましなくらいだが、何故か最近やる気を出し、手伝いをしたがつてくる。俊介の仕事は期間的に忙しい時とそうでもないときがあり、今はスケジュールに余裕があるので、そうしたがっているのかもしれない。

「俊介、餃子に入れるニラはなるべく小さく細かく切るようにしてね？自分で餃子を食べたときのニラの大きさを思い出して、そのくらいの大きさにしてよ？」涼子は材料を用意しながら俊介に言った。「ほお、了解！細かい方がいいのか」まな板の上に置いたニラをそっとういながら、真ん中からざっくり切った。そして今度は斜めにザクツ、ザクツと切り出した。俊介は玉葱のようにみじん切りにすればよいと思っっているらしく、包丁を縦、横、斜めといういろんな角度から切っている様子だった。

たちまち、まな板がニラの緑に染まって、歪に切れたニラがまな板から床や調理台に飛び散っていった。

涼子はそれらを拾いながら「斜めに切らなくなつて、細くなるでしよう？同じ方向に細くきゆうりの輪切りみたいに切ればいいんだから」

「細かく切れつていうことだから、微塵でいろんな形があるから、こう切ればいいんだと思つてやつたんだよ」

涼子はクスツと笑つて、相変わらずやつてくれるなあと俊介を見ていた。そろそろフードプレセッターでも買ったほうが、料理の下拵えと俊介のためにいいかな？と、思った。

挽肉と俊介の切ったニラと調味料を混ぜ合わせ、餃子の種を作る。今度は二人で餃子皮に種を入れ包み始めた。

涼子は俊介に何度も説明して、お手本を見せるが、俊介の指はぶつとく、餃子の皮にうまくギャザーを寄せられない様子で、悪戦苦闘しながら作業していた。

「なんだこれ、中からあんこが出てきちゃつたよ」子供が作ったものよりも不格好に見える餃子を涼子の目の前に持つてきて見せた。俊介から見ると普通サイズの餃子も一口サイズのように小さく見える。

「やだそれ、餃子の形になってないじゃない？どう見たつてラビオリとかパイみたいになつてるんですけど」涼子は呆れた顔をしながら、自分が作った餃子を見せた。

「餃子は両面ひっくり返して焼かないのだから、フライパンの上につきつちり乗るような形に作つてくれないと、パリパリの皮の触感が味わえず美味しくできないわよ」

「はい、先生！」俊介が幼稚園の子供にでも戻つたように返事をした。

涼子はこの白クマのように図体ばかり大きく、動作の鈍い不器用な旦那を飼い慣らすには、まだまだ時間がかかりそうだと思つた。

白い大きな皿に歪で不格好な餃子が並んでいたが、食べてみると味の方は、それほど悪くなかつた。

おまけ（餃子作りのやりとり）（後書き）

最後までおつき合い頂き、感謝致します。

ありがとうございました。

評価ができそうでしたら、よろしくお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1035h/>

---

あみタイト泥棒

2010年10月28日06時46分発行